

対談 ~ 能勢を語る ~



原田 正夫 能勢町観光協会会長

この対談は町内で頑張っておられる個人や団体の方にスポットをあて、町長と対談していただく企画であり、本年1月号に続き2回目の企画となります。今回は4月に販売された能勢町の観光情報誌「おおさかのてっぺん」について、それぞれの立場からお話をいただきたいと思います。

おおさかのてっぺんとは何なんでしょうか

町長：ある職員が、府内の地図を見ながら、「能勢は大阪のてっぺんですな」と言っただけです。おもしろいことを言うなあと思いましたが、私は、自然を活かした町づくりというものを常々考えており、その言葉が、町としてこの情報誌のコンセプトにぴったりに感じました。提案したんです。



福畑 慎吾「SOTOダイニング」オーナー

発行にあたって、どのようなところに苦労されたのでしょうか

原田：この本の編集に携わってくれた編集委員の方をはじめ、関係者の方々にお礼を申し上げたいと思っています。観光協会では、これまでから観光パンフレットの作成やホームページの立ち上げなどを手掛けてきましたが、これほど大規模に、しかも新しいことに取り組むことには正直なところ勇気が必要でした。(笑)

しかし、町長からの提案を受け、他市が発行している情報誌を見ると、大手の編集社が作る情報誌とは違った趣で、読んでみると吸い込まれるような、そして読み終わると何か心が満たされたような感じがあります。能勢を知ってもらいたい、「能勢の良さを見つけてもらいたい」「こつこつという気持ちで取りかか

町内外からのお客様をお迎える立場から「てっぺん」をどう見ておられますか

福畑：本当のところ計画当初は、それほど期待していませんでした(笑)しかし、完成したものを私自身、初めて見せていただき、他の情報誌にはない素晴らしい内容だと思いました。そして当店で予想以上に反響がすごく、驚いています。

最近では、大手の情報誌でも3,000部売れたらベストセラ―と言われるそうですが、「てっぺん」は6,000部も売れている。その理由は何でしょうか

原田：これまでは、寺社や仏閣、棚田と言った昔からあるもの、そのものを紹介するという切り口だったんです。

しかし、この本はそこに「人」を加えました。地道に取り組んでいる人にスポットを当てることに力点を置きました。能勢には観光バスを連ねて訪れることに飽きている人、こそこそ受け入れられる場所がたくさんあると思うんですよ。それがにじみ出ているところが評価されたのではないかなと思っています。

福畑：来店される方は、日常から離れて非日常を求めて来られるんですよ。我々にすれば、ごく普通の日常が都会の人からすれば、すごく贅沢な時間であり場所なんだと思います。お店では、新たに植えた花より、自生している素朴な山野草を見て楽しんでおられるお客様の姿を見ます。なつかしさや非日常を「てっぺん」から感じとられたのではないのでしょうか。



賑やかなことが全てにおいてよいのではなく、あまり多くの人が知らないことが魅力と言ったことなんでしょうか

福畑：飾らない能勢を表現できるところは非常に評価できますね。それに「てっぺん」というネーミングが良かったと思います。能勢に住んでいる人が自分の町に誇りを持てますよね。(笑)